

市民海外レポーター瀧和子さん（ドミニカ共和国）
派遣期間 H29.10～H31.10

カリブの島より... vol. 4

ドミニカ共和国 瀧 和子（音楽）

長い冬休みを終え、ようやく大学も本格的に動き始めました。

配属先から写真掲載の許可をいただきましたので、写真を添えて活動の様子をお伝えしたく思います。

教えているのは発声法です。

発声法を、演劇科の学生と音楽科の学生、大学合唱団で指導しています。これから児童合唱も加わる予定です。

相模原の中学校では、発声法は「呼吸」「鼻腔」「丹田」それから「空間」にポイントを置いて教えてきました。それをそのままこちらでも教えています。

ある声楽のクラスで、「歌うときは、鼻腔（スペイン語で fosal nasales）を使います」と言うと、20人ほどいた学生たちがいっせいに笑い出しました。どうして笑うのだ？ と問いますと、「知ってる、知ってる、fosal nasales、fosal nasales！」と言って学生がプリントを見せてくれました。プリントには頭蓋骨の図があり、鼻腔のあたりに赤ペンで大きく印がなされていました。この大学には声楽の先生が1人いらっしゃり、その先生より日ごろから、鼻腔、鼻腔、鼻腔、と一声出すたびに言われるのだそうです。

ドミニカ共和国と日本は地球の反対側くらい離れた国なのに、発声法は同じなのだ、と、深い感慨をおぼえました。

発声法とは、声と体を楽器として使うための方法で、用途に応じていろいろなアレンジがありますが、「呼吸」「鼻腔共鳴」「空間共鳴」は共通の基本で、その先は、たとえば歌を歌う場合の発声法は、長いフレーズを歌いきるための呼吸法や体のバランスを取るための姿勢、正しい音程をとるための鼻腔の使い方などが必要となり、演劇の場合、どのよう

市民海外レポーター瀧和子さん（ドミニカ共和国）
派遣期間 H29.10～H31.10

な動き、姿勢であってもむらなく声を客席に届け、表現する体の使い方が必要になります。また、マイクを使うアナウンサーやミュージカルなどは、マイクに呼吸音を入れない呼吸法の習得も必要になります。

それでは、写真を交えながらご紹介していきます。

下の写真は、演劇科の授業の様子です。



顎を固定すると、鼻腔共鳴が得られやすくなります。その練習風景です。



こちらは歌の練習をしているところです。

立っている場所は学内の小さな劇場ホールの舞台です。

市民海外レポーター瀧和子さん（ドミニカ共和国）
派遣期間 H29.10～H31.10

みな、手にスマートフォンを持っているのにお気づきでしょうか。

実はこれ、歌詞をスマホ画面に表示させて歌っています。

ここでは印刷物を用意するのが簡単ではなく、スマートフォンですむものはスマートフォンを活用しています。インターネットはみなさん使えますので、「Amazing Grace の歌詞を探してきて」と言うと、あっという間に見つけてきます。

下の写真は、セルフィーで記念写真、そして学内劇場ホール前にたむろする学生たち。



それから、大学合唱団の練習風景を動画でアップしておりますのでご覧ください。

<https://youtu.be/TqNnTutKrcY>

<https://youtu.be/03tk3PyKuZI>

合唱団の練習後、見上げた美しい薄暮の空。



市民海外レポーター瀧和子さん（ドミニカ共和国）
派遣期間 H29.10～H31.10

サント・ドミンゴの月。日本とは見える角度が違います。



サント・ドミンゴの学生の特徴として、身体能力の高さ、反射神経の良さ、美的センスの良さがあげられます。歩く姿勢も大変きれいです。

この国の人々は歌と踊りが大好きで、老若男女を問わず、ドミニカ共和国の伝統ダンス「メレンゲ merengue」を踊ります。ほんとうによく踊ります。その踊りの動きにその要因があると思います。興味のある方は動画サイトで「merengue republica dominicana」で検索してみてください。動きは大変シンプルで、誰でも簡単に踊れます。この、簡単で誰でもすぐに踊れる、だからいつも踊っている、というところがミソかもしれません。

道路環境がよくないことも要因としてあげられるでしょう。

歩道のアスファルトが木の根で盛り上がり割れているくらいはふつうのことですし、マンホールのふたが外れたままというのわりと普通に見られます。車道と歩道の段差が日本の倍以上ある箇所も少なくありません。また、車の運転は荒く、いつ、どこから何が飛んでくるかわからない路上ですが、人々は当たり前のようにかわして歩いています。それが運動神経と反射神経を磨いているのでは、と推測しています。わたしもずいぶん磨かれました。ぼーっとしていると生き延びることができないこの街です。

その運動神経、反射神経、美的センスは芸術には大変有利だと見ています。実際、声も大変よく響くいい声を持っていますし、鍛え甲斐がある学生たちです。

市民海外レポーター瀧和子さん（ドミニカ共和国） 派遣期間 H29.10～H31.10

一方、不利な特徴もあります。

この国の人々の気性として、飽きっぽいこと。そのため、丹念にコツコツと積み上げることが基本的に苦手です。そして初等教育～中等教育が十分ではなく、そのため論理性に脆弱なこと。発声法でもなんでも、技術は手取り足取り教えることができますが、そこに論理がないと、メソッドとして残すことができません。わたしが帰国したら教えられる人がいなくなる、それでは元の木阿弥ですので、今教えている技術を、彼ら彼女らの理解できる論理でいかに説明し、形として残すかがわたしの課題でもあります。

サント・ドミンゴの人々は陽気で人なつこく、飽きっぽいところはあるものの、やるときは本気でやる集中力も持っています。細かいことにはこだわらず、少々のは気にもしません。たとえば、わたしの住むアパートのドアはどこも立て付けがよくないのですが、それくらいはふつうです。スーパーで売っている肉の切り身に骨が混ざっているのもふつうですし、いつだったか、お米の袋に異物（ビニール）が混ざっていたことがあったのですが、この国では取りだして捨てておしまいです。人々は良くも悪くもとてもおおらかです。自動車の運転は非常に荒っぽいですが、歩行者には大変優しく、姿を見かけるとすぐに停まって、手で「行け、行け」と合図してくれます。その代わりみなさんせっかちなので、渡るときはささっと急いで渡らなければいけません。

それから「夜は寝る」。わたしは大学の近くに住んでいて、学生たちもたくさん周囲に住んでいます。週末にその学生たちが集まって大騒ぎしていることがあるのですが、どれほどの大騒ぎでも、夜12時前には静かになります。基本的に夜は寝る人たちです。これも学生たちの美しさの秘訣かもしれません。